

求められる研究への情熱と強い意志

研究管理官 中井 孝

バブル崩壊後の日本社会に認められる閉塞感は、なかなか払拭できないでいる。デフレスパイラルといわれる経済状況、戦後最大の失業率に加えて、各方面で失われてきたモラルが引き起こす事件などに影響されているのであろうが、縦割社会の弊害が極限に達しているところにも一つの大きな原因があると考えられる。日本における縦割社会は明治維新以来培われたものといわれ、ありとあらゆるものがこの範疇で思考され、経済活動をも支配しているので、弊害が如何に大きくなるうとも簡単に崩壊するとは思えない。

研究の分野でも、19世紀以来専門分野を細分化することにより著しい成果を挙げてきた学問、科学技術の陰でさまざまな弊害が出てきている。二酸化炭素、VOC、ダイオキシンなど環境にかかわる諸問題は人間の存在自体を脅かす深刻な例として挙げられよう。個別技術の発展の段階では、それぞれの合理的、効率的な開発が目標とされ、その目標自体は達成されたとしても、予期していなかった結果が実際に生じてきており、そのことの克服が引き続いて新たな目標となっている。

研究開発当初よりこのような負の側面をも予測して対応を考えておくべきであるとの趣旨から、自然科学だけではなく、人文・社会科学をも含めたプロジェクトの形成が最近強く叫ばれている。しかしながら、そのようなプロジェクトを企画、運営できるようなフィロソフィを持つ人材不足が、いわゆる文理融合プロジェクト形成の障壁となっている。大学における研究・教育の体制がやはり縦割的で学際的な人材を養成しえなかったことにも、その一因はあろう。ところが、そのような人材が育成されるまで待つことができるほど現在の世の中はのんきではない。すべてがドッグイヤー、あるいはラットイヤーと呼ばれる速度で変化しているからである。

そこで、ブレイクスルーとして考えられることは、既成の研究者が縦割社会にどっぷり浸かっていた発想を変えて分野横断的な行動をお互いに起こすことである。逆説的に聞こえるかもしれないが、そのためには自分の専門分野でまず本物のプロフェッショナルな研究者として成熟することが必要であるとする。そして、最後に最も有効な武器は、研究に対して「情熱」あるいは強い具体的な「意志」を一人一人の研究者が持つことである。情熱を持った強い意志のもとで目標を実現させる過程が研究者としては何ものにも代え難い喜びのはずである。未知の世界を開拓して、過去の知見の上に1行でも、2行でもオリジナルな成果を積み上げていくことは本来極めて楽しいはずである。ただ状況が変わるのを待つ姿勢から生れてくるものはほとんどない。なお、以上のことは研究者だけではなく、その他の職業人にも当てはまると考えている。



[巻頭言] [[リサーチトピックス1](#)] [[リサーチトピックス2](#)] [[リサーチトピックス3](#)] [[リサーチトピックス4](#)]
[[リサーチトピックス5](#)]
[[研究解説1](#)] [[研究解説2](#)] [[研究解説3](#)] [[おしらせ](#)]
[[所報トップページへ](#)]